

拠、そして意志の自由の根拠があります。

ここで神の像について特に注意すべきことは、この言葉が何よりも「魂」について使われているのは間違いないのですが、それを極端におし進めてしまうと「霊肉二元論」という異教哲学に落ちていってしまうということです。例えば、カルヴァンも『綱要』の第十五章で「また『神のかたち』の第一義的な座は、精神と心情に、あるいは『たましい』とそのもろもろの力とにあったであろうとはいえず、人間のどの部分でも、その肉体といえども何らかのきらめきが輝かぬところはないのである」と言っています。このように人間を他の動物と区別し、分離させている限り、「肉体」も神の像に含まれていることを否定していません。

二十世紀後半の時代、機械文明の高度な発達により、人間と機械の区別があいまいになっています。また、進化論によって人間と他の動物の区別があいまいになっています。こういった風潮の中でキリスト教哲学と世俗思想との対決をはっきりさせていかねばなりません。このとき神の像に関する議論は、「魂」だけではなく「肉体」についても、もっと深められる必要があると思います。これはまた、神の子が動物の形をとらず人間の形をとって受肉したもうた、そしてその肉の体が十字架上で死に、よみがえられたもうた、という観点からも重要であろうと思います。

## 七 進化論

私は話の初めに、歴史上の科学とキリスト教の衝突の中で、「十七世紀のガリレオ裁判」と「十九世紀のダーウィンの進化論」の二つが特に重要である、と述べました。「ガリレオ裁判」についてはすでにお話ししましたので、次に「進化論」についてお話ししたいと思います。

「ガリレオ裁判」の場合にはキリスト教の方に問題があったのですが、「進化論」の場合には今度は科学の方に問題があります。十七世紀の近代科学は、「神の創造のわざと摂理とを自然界の中で明らかにしよう」との意図のもとに、つまりキリスト教認識論のもとに誕生したのですが、十九世紀の進化論はそのキリスト教認識論を否定する形で出てきました。生命の起源と種の起源を説明しているはずの進化論は、近代科学の方法論によって分析してみると、実は何も説明していません。私は『進化論を斬る』という本の中でそれを詳しく述べ、進化論に代わる「生物変換」という仮説によって生命の起源と種の起源を説明することを試みましたので、そちらを参照して下さい。

ここでは進化論を支える強力な哲学である進化主義を、認識論の問題としてとり上げてみたいと思います。カール・ポパーというウィーン生まれのユダヤ人哲学者が一九七二年に出版した『客観的知識』という本の中で、次のように述べています。

「ダーウィンの自然淘汰の理論の発見は、しばしばニュートンの重力理論の発見に比較されてきた。これは間違っている。ニュートンは物理的世界の相互作用とその結果として生じる振舞いを叙述しようとして一連の普遍法則を定式化したのである。ダーウィンの進化理論は、なんらこのような普遍法則を提示しなかった。ダーウィンの進化の法則といったものは存在しないのである。事実、進化の普遍法則——『分化』と『統合』の法則——を定式化しようと試みたのは、ハーバート・スペンサーであった。私が示そうと努めたように、これらの法則は興味なくはないし、またまったく真であるかもしれない。しかしそれらは漠然としており、ニュートンの法則と比べほとんど経験的内容を欠いている（ダーウィン自身、ほとんどスペンサーの法則を重要視しなかった）。それにもかかわらず、われわれを取り囲む世界についてのわれわれの描像へのダーウィンの進化論の影響は、少なくともニュートンの影響と同じほど——深くはないにしても——大きかった。それというのも、ダーウィンの自然淘汰の理論は、世界における計画や

目的の存在を純粹に物理的な用語で説明することによって、目的論を因果論に還元することが原則的に可能であることを示したからである。ダーウ、インがわれわれに示したことは、自然淘汰のメカニズムが原則として創造主の行為と彼の目的ならびに計画を模倣しようということ、そしてまたそれは目的または目標をめざした合理的な人間行動をも模倣しようということであった。」

つまり一口で言うると、自然淘汰が創造主の代わりをするので、創造主はもはやいらぬということなのです。ちなみにポパーの『客観的知識』という科学の認識論に関する著作の副題は、「進化論的アプローチ」となっています。進化論的認識論はキリスト教認識論に対する完全なアンチ・テーゼなのです。十七世紀、ベーコンは「科学という部門は質料因と作用因を扱い、形相因ならびに目的因は哲学に属する」と分類し、これによって哲学から科学を方法論的に分離することが可能になりました。しかし進化論的認識論は、形相因と目的因を哲学からも追放する、と宣言しているのです。ポパーは「科学の目的とはトライし、そしてエラーを見出し、反証し、修正する過程で満足のいく説明を見出すことである」としています。そして思考を始める出発点の選択は重要ではなく、満足のいく説明のためには出発点はいつでも批判でき修正できる、と言っています。現代における科学の目的というのはこの程度に貧困なのです。むしろ科学が目的のないゲームとしてとらえられている、と見た方がよいでしょう。したがって科学技術が何の目的に使われようともかまわない、それは科学者の責任ではない、といった風潮を生み出していくのは当然です。

進化論的認識論では、形相因と目的因が追放されている、ということに特に注意しなければなりません。ここに進化論というパラダイムがキリスト教思想にとって破壊的である理由があります。あからさまな無神論であれば、キリスト教の側ははつきりした対決の姿勢をとることができるでしょう。しかし進化論的認識論はキリスト教にとってあからさまな無神論よりも、もっと手ごわい相手です。それは目的であるとか、意志であるとか、総じて人格がかかわ

ってくる事柄に対する人々の感受性を鈍らしてしまう働きをもっています。進化論的認識論はキリスト教思想の中に侵透してきてこれを内側からくずしていく可能性をもっています。これはキリスト教思想の「知の構造」にかかわる大事な問題です。

今までの境界条件という考え方で進化論を見てみましょう。さきほど微分方程式と境界条件の例として水素原子をとり上げました。原子のレベルでも、原子が集まった分子のレベルでも、さらに分子が材料になってできている目に見える色々な物体でも、または生物の体でも、それぞれの階層で、自然のそれぞれの局面で境界条件の問題が関係してきます。その事にミクロな原子の世界からマクロな太陽系や惑星の世界まで、例外はありません。さて、進化論の主張というのは「より単純なレベルにおける法則の結果が、より複雑なレベルにおける法則の境界条件を規定する。その規定の仕方は偶然であって何ら法則性はない」というものです。ニュートンの場合でしたら、第一番目の境界条件が与えられ、地球が太陽のまわりをまわる楕円軌道をとるようになったところに神の計画と目的を見たのです。進化論では銀河の形成の途中のレベルで、偶然に第一番目の境界条件をとるようになった、ということになるわけです。また、地上での生命の起源と種の起源に対しても、はつきりした法則が存在し、それを成り立たせる境界条件を神が与えたとは見ないで、生命は偶然に誕生しより高等な生物に進化していくような境界条件を偶然にとるようになった、と説明するわけです。

ここでは理性的に物を考えることが、完全に放棄されてしまっています。分からないことは何でも神のせいにしてしまう神秘主義も誤りですが、同じように分からないことは何でも偶然のせいにしてしまう進化主義も誤りです。どちらも人間という被造物に特別に与えられている理性を放棄してしまっています。神は無秩序とでたらの神ではありません。目的と計画をもった存在であり、それは歴史を通して実際に示されてきました。もしクリスチャンが理性

的に物を考えないで、進化主義の偶然を神に置きかえて説明をしようとするのであれば、進化論者と大差ありません。教会において、もっと神の現実支配、歴史支配を説いていくことが大事です。教理的には創造と摂理について深めることにより、キリスト者の中に科学を位置づける物の見方が次第に養われていくのではないかと思います。

## 八 科学と倫理

次に現代の科学技術と倫理について考察を進めたいと思います。これを考える際に核兵器の問題を避けて通ることはできません。核兵器は、物理学上の基礎理論が大量殺人の道具に直接応用されてしまった最初の例です。十七世紀の時代と違って、現代の科学技術は人間の原罪性というものを如実に見せる場合が多くなっています。もちろん十七世紀の近代科学の誕生のときにも原罪性、つまり人間の墮落ということが深くかかわっていたことはすでに見ました。ただしそのときは、墮落からの回復の手段としての科学技術であったのですが、現代の巨大化した科学技術はその構造上、墮落そのもの、人間の罪の実態をはっきり見せている場合が多いといえます。

核の脅威が最近言われていますが、相手の先制攻撃をおさえるために相手以上の核兵器を保有すべし、という核抑止力という考え方を採用しているために核は地球上にふえ続けこそすれ、減ることはありません。原爆がアメリカで最初に作られたときにすでにこの考え方があらわれています。第二次大戦中ナチス・ドイツが原爆開発をする恐れがあったため、ドイツからアメリカに亡命していたユダヤ人物理学者アインシュタインが「残虐なヒトラーが原爆を持ったら大変なことになる」と心配して米大統領ルーズベルトに原爆開発の緊急必要性を進言した（一九三九年）ことにより核兵器という新型爆弾が誕生したのです。ですから核というのはその起源からして抑止力的発想が根底にあ

り、それは「目には目を、歯には歯を」という論理なのです。つまり、イエス・キリストの教えとは反対であり、現代科学技術が人間の罪をあらわに示している一例です。これは現代の物理学とその技術とについてだけ言えるのではなく、生命科学とその技術についても等しく言えます。

現代の高度な科学技術を使って、特に生命医学や遺伝子操作等を使って積極的に人間改造が押し進められる時代に入っています。また、現代生物学をもとにした人間観、世界観の樹立を目ざす社会生物学の台頭もあります。こういった問題は単なる世俗的な関心を呼ぶだけで、御言の宣教と魂の救いに専念する教会のかかわるべきことではない、という考えもあるかもしれません。しかしキリスト教認識論の観点から考えると、現代における人間改造や人間操作という事柄は大きな挑戦になってきます。というのは、人間が現在ある姿は「あまりよいものではない」という認識、つまり「人間に病気や死が存在し、ストレスの多い管理社会で心の病が激増し、戦争の危機はますます増大し、環境汚染が進行し、人口増大はおさえられないのに食料やエネルギー資源が不足してきている。地球上はとも住みにくくなってきている」という認識は誰でも感じてきているからです。

キリスト教認識論に立つ人であれば、これらの原因を何よりもまず霊的なものとして、つまり、神への背き、原罪性に見出すでしょう。可能であれば、人間の墮落からの回復、罪からの解放という中に解決を見出し、創造主との関係を自覚的に保つ中で、人間仲間への責任（社会へのディアコニア）と、他の被造物を正しく治める役割をもう一度確認することから出発するでしょう。しかし、ヒューマニズムの立場の人々または進化論的認識論に立つ人々は、これらの憂うべきことは、人間が今より進歩することによってとり除き得ると考えるでしょう。つまり人間をより良い方向へ改造してこうということなのです。

これは彼らにとって「してはいけない」事柄なのではなく、進化という彼らにとって定式化された「自然法則」に

単に手を貸すことであり、むしろ積極的に「すべきこと」になっていくのです。さきほど、現代の科学は目的のないゲームのようになってしまっている、と述べましたが、この人間改造という点において大きな目的を見出したと言わなければならない。彼らにとって科学技術を使って人間を改造することは悪いことではなく、今の憂うべき状態をとり除くためにも良いことなのです。これが進化論的認識論の論理的帰結です。情緒的反発だけでは現代の生命科学の世界的潮流に対応することは不可能です。

私は主に従う一科学者として、言葉と行動における基準を次のようなところに求めたいと考えています。それは国家と教会との関係の類比によって表現できます。

十六、七世紀の宗教改革の運動によって、中世にはあいまいであった国家と教会の関係が次第に切り離されてきました。国家の政府のつとめと教会のつとめとを区別し、教会は政治次元の発言によって政府のわざに介入するのではなく、神の言を宣べ伝え、とりなしの祈りをささげることによって政治の姿勢を正していく、という方向です。これはプロテスタンティズムによって可能になったことです。科学の誕生について似たようなことがいえます。つまり、中世のスコラ学や神学的自然学では科学と哲学があいまいに結びついていたのですが、これから方法論的に「実験や観察を最終的より所とする」部門として科学を切り離したのでした。そしてこれはキリスト教認識論によってはじめて可能になったことがらです。

ところで国家と教会の問題の場合には、国家のつとめと教会のつとめは一応切り離されているが、官憲や為政者は神によって立てられ正義と公平を行なわせるために神が彼らに権力を与えていると了解されています。したがって、もし正義と公平を守ることをしない権力があるならば、それは神によって立てられた権力であると必ずしもいえない。あくまでも神の法に従うがゆえに地上の法に従わない、つまり悪しき国家権力に対する抵抗権という考え方が生まれます。<sup>⑭</sup>ここにキリスト者の政治的発言、行動の倫理の基礎があります。

現代の科学技術についても同じことがいえるのではないかと思います。つまり、科学は方法論的には思想、信条、イデオロギーから切り離されているが、認識論的には神が人間仲間への責任を果たし、他の被造物を正しく治めるために墮落からの回復の手段として人間に科学技術という高度の理性的活動を与えています。したがって、もし人間仲間の墮落した悲惨な状態を回復するのではなく、さらに悲惨な状態に追いやってしまうような科学技術が出てきたならば、それは神によって与えられたものとははやみなされなくなってきました。あくまでも神の法に従うがゆえに人間の知恵には従わないという事態が出てきます。

世界の科学者、技術者総数の二〇％は軍事研究の開発に従事しているといわれていますが、私自身はクリスチャンの一科学者として、発言し、行動する倫理をここに求めたいと思います。さらにひとこと言い添えますならば、現代の最も憂うべき事態は、悪しき国家権力と悪しき科学技術とが結びついてしまう可能性が非常に強いということです。

## 九 神学への要望

聖書、特に創世記を読むと、人間の責任の問題が大体四つに分けられるのではないかと思います。<sup>⑮</sup>

- ① 人間は人間仲間に対して責任を負っていること——このことから生命医学を使って他者をどこまで治療、操作することが許されるのか。
- ② 人間は子孫に対して責任を負っていること——このことから人間の遺伝子を操作することが許されるのかどう

か。いったん遺伝子上に変化をもたらすと、もとはもどらず、子々孫々にまでその形質は伝わっていつてしまうからです。

③ 人間は地球上の他の動植物と生活の領域を共有していること——このことから開発の名のもとに、次第に生態系を破壊していくことが許されるのかどうか。

④ 人間は地球上の他の被造物を正しく治めるように命ぜられていること——現代の科学技術がその目的のために本来に正しく使われているのかどうか。

特に第二番目の「人間は子孫に対して責任を負っていること」については、遺伝子操作や精子の冷凍保存の技術が飛躍的に進歩していることによって大きな問題がつきつげられています。それは古典的な「肉体」と「魂」の問題に關係しています。人間がどの段階で人間になるのか、つまり人間の魂がどの段階で入ってくるのか。受精の瞬間であるのか、出産のときであるのか、という問題です。

これは非常にむずかしい問題であろうと思います。しかし、やはり緊急を要する問題です。「汝、殺すなかれ」という戒めと關係して考えられねばなりません。現代の科学技術が進歩するスピードは、私たちのおじいさんの時代とはもはや比べものになりません。去年、不可能であったものが、今年には可能になり、来年はもう当たり前というような時代です。科学技術の発達が高度になればなるほど、それを支える人間の倫理も強いものが要求されてきます。ここで神学者の果たすべき責任は大きなものになっています。

つまるところ、神が何の目的で特別に理性をもった被造物である人間をお造りになったのか。神の意志と神の全被造物に対する計画と支配とをもう一度、イエス・キリストの主権のもとに、終わりの日のさばきを踏まえつつ、改めて確認していくことが、現在必要とされているように思います。

## 注

- ① A・D ホワイト『科学と宗教との闘争』(岩波新書、一九三九年)五一頁。
- ② 前掲書 四六頁。
- ③ なおこの点に関しては、有賀寿「近代科学の発展に資したカルヴァンの影響」『カルヴァンの信仰と思想』(すく書房、一九八一年)二四〇—二八四頁、も参照のこと。
- ④ 豊田利幸「ガリレオの生涯と科学的業績」『ガリレオ(世界の名著21)』(中央公論社、一九七三年)一〇二頁。
- ⑤ アウグスティヌスの言葉とは、「信者の中には、天界の運動に関して、それは静止しているのか動いているのか、という質問をする人々がいます。そして、もし動いているのなら、どのようにして支えられているのか、と彼らはいいます。もしじっとしているとしたら、天界に固定されている星々は、どのようにして東から西へ回るのか、とまた、北極に近い星ほどより小さい円を描くから、天界は、もし未知の他の極があるとすれば、いくつかの極のまわりを回転しているのか、あるいは、他の極がないとすれば、円板状に動いているのか、などという質問をする人々がいます。このような人々に対しわたくしは、それらのうち、どれが本当にそうなのかを見出すためには、精細かつ深い検討が必要であろう、と答えましよう。しかしながらわたくしには、これらのことを行ない、議論する暇もないし、むしろ、直接、救いや教会のための教化活動を行なうほうが、わたくしにとって、より本質的な義務であると考えます。」
- ⑥ F・ベーコン「ノウム・オルガナム」『ベーコン(世界の大思想6)』(河出書房、一九六六年)四一一頁。
- ⑦ J・ロック「人間知性論」『ロック(世界の名著32)』九〇頁。また、H. Dooyeweerd, *A New Critique of Theoretical Thought*, trans. by D. Freeman and H. De Jongste, Amsterdam and Philadelphia, 1957, Vol. 3, p. 39.
- ⑧ J・カルヴァン『キリスト教綱要I』(新教出版社、一九六三年)一五章三。
- ⑨ 例えば、カール・バルト『教会教義学』第三卷第二分冊(創造論第二部)四六節で相当の頁数をさいて、魂と肉体の問題を論じている(邦訳、二七五—五一一頁、新教出版社、一九七四年)。特に脳の機能と自意識について書かれている所で、十九世紀

の唯物論を批判し、さらに宗教改革以後の神学の自然科学への対応のまずさを批判している(四六三頁)。この時代(一九四八年)にあっては鋭い警告となっているが、第一にバルト特有の弁証法を用いていることと、第二に科学の方法論に付随する境界条件の問題を踏まえていないことのゆえ、はっきりした認識論の提示にはなっていない。

⑩ 稲垣久和『進化論を斬る——科学とキリスト教』(いのちのことは社、一九八一年)第三章。

⑪ K・ポパー『客観的知識』(木鐸社、一九七四年)二九九頁。

⑫ F・ベーコン『学問の進歩』『ベーコン』二八頁。

⑬ K・ポパー『客観的知識』二一七頁。

⑭ 前掲書、一一〇頁。

⑮ 丸山忠孝「テオドール・ド・バーズの教会論」『カルヴァンを継ぐもの』(すぐ書房、一九七八年)一一九―一五八頁。渡辺信夫『神と魂と世界と』(白水社、一九八〇年)第七章。

⑯ W・フーバー、H・テート『人権の思想』(新教出版社、一九八〇年)二三七頁。

(国際基督教大学講師)